

備陽史探訪

第83号

発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL. (0849) 53-6157

大田庄をめぐる人々

会長 田口義之

世羅台地に広がる広大な沃野は、古代より人々の憧れの地であった。その開発はよほど古い。世羅町の寺町には康徳寺古墳といて郡内最大規模を誇る古墳が存在するし、西隣の堀越には精美な切石で造られ、「石扉」まで付いた神田2号古墳が山麓に口を開けている。小さな円墳はそれこそ数知れない。

この地に中世豪族の活躍が知られるようになるのは平安末期のことだ。永万2年、平清盛の5男重衡は、当時世羅東条と呼ばれていた大田・桑原の両郷を後白河院に寄進し、「大田庄」として院庁の承認を得た。しかし、当時十才にしか過ぎなかった重衡にこんな大事が出来るはずがない。父清盛の強引な後押しがあつただろうし、在地の協力が必要である。そ

して、この荘園の設立に陰で大きな功績があつたと考えられるのが、橘一族の存在だ。後の荘園文書には「下司」として橘光家・同兼隆の名があり、彼らこそ大田庄成立の真の立役者であつたに違いない。事情はこうだ。平安時代の後期、各地の豪族達は私財を投じて「私領」を拡大していった。しかし、「公」の土地である国司の課す重税から逃れることは出来ない。国司が受領と呼ばれ「倒れる」ところの土をもつかめ」と言われるほど貪欲に私腹を肥やしていた時代だからなおさらだ。そこでこうした地方の豪族達は「権門」と呼ばれた中央の権力者に取り入って争って自分の私領を荘園としていった。いわゆる「寄進地系荘園」の成立だ。「荘園」は名目的には中央の「荘園領主」のものであった。しかし彼らは都に住んで「年貢」さえ決められた通りに、送られてくれば、在地の支配には文句は言わない。在地は元々の在地領主が「下司」として従来通り

村々の支配をしている。同じ税金を納めるのだったら、なんやかやと注文を付けるやかまし屋の国司より、遠く離れた都にいる荘園領主の方がましだというわけだ。大田庄が立券された当時この辺り一帯に勢力を伸ばしてきたのは平氏である。おそらく世羅郡の地方豪族であつた橘氏は、平氏の家人になると同時に、自分の領地を平氏の荘園とした。平氏も平氏で後白河院の機嫌を取るため、この荘園をさらに院に寄進した。「大田庄」の成立だ。

しかし、平氏と結んだ橘氏は、このことで後には荘園から追い出されてしまう。平氏は「奢る平氏も久しからず」でやがて壇ノ浦に沈み、「鎌倉幕府」の成立となる。この幕府は相模の鎌倉に政庁を置いたように徹頭徹尾「東国」の政権であつた。西国の有力豪族はやがて幕府から消される運命にあつた。橘氏の場合、もと平氏の家人であつただけになおさらだ。建久7年、橘氏は幕府に対して「謀反」の咎あり、ということ以下司職をあつさり取り上げられてしまふのである。

幕府は橘氏に代えて、三善氏を大田庄の「地頭」として送り込む。しかし、三善氏は元々京都の下級公家だ、根っからの坂東武者ではない。

荘園領主もその頃には院から高野山に替わり、荘の中心に高野山の別院である今高野山を設け、荘園支配を強力に進めようとする。ここに始まるのが「領家と地頭のあらいあい」だ。三善氏の荘園支配は障害の連続であつた。特に鎌倉時代も末になると地元で新たな勢力が興り、高野山と結んで三善氏の前に立ちはだかつた。その代表が久代氏の出身と推定される「淵信」である。この人物は一種の年貢請負人で、大田庄だけでなく各地の荘園を手広く請け負い莫大な財産を蓄えていた。地頭の年貢滞納に手を焼いた高野山は、淵信を荘園の「預所」に任命し、地頭と対決させた。裁判はいつの時代でも「手間と金」がかかるものである。彼にはこのどちらもあった。一方三善氏は情けないことに幕府の役人で金がな。こうして淵信は何年にも及ぶ裁判を戦い抜き、高野山に有利な判決を勝ち取る。得意の絶頂の淵信は大名行列を組んで、尾道街道を練り歩いた。彼の政敵は言う、「淵信の行列は女武者を数十騎先頭に立て、自らはさらびやかな数丁の輿に乗り、近く人々を理由もなく「打擲蹂躪」した、その権勢は一国の守護も及ばぬ程で、自余の地頭御家人如きは問題にしないほど奢り極めた……」

後の「ばさら」者の原型をここに見ることが出来る。

莊園領主が力を持ったのも南北朝時代までであった。時代は本格的な「武士の世」となり、「不在地主」であった莊園領主は次第に力を失って行く。高野山も同様である。備後に入ってきた守護山名氏と結び、なんとか大田庄を支配しようとするが時代の流れには逆らえない。山名氏と「守護請」の契約を結び、年貢だけはなんとか確保しようとしたのもつかの間、守護山名氏は年貢未進を重ね、次第にその領有は有名無実のものになって行くのである。

代わって、大田庄に姿を見せるようになったのが「国人」と呼ばれる地方の実力者である。守護山名氏も本国は遠く但馬国(兵庫県北部)で、高野山の場合と変わらない。在地の支配は地元の有力者に任せるしか方法がない。山名氏の大田庄支配は室町幕府健在な時代は、それでもまだ何とかうまく行った。しかし、「応仁の乱」が起り、幕府の権勢が衰えると山名氏も高野山と同じ運命をたどっていった。守護は「下見氏山内氏」などにその「代官職」を任命する。確かに形式の上ではそうなのだが、実態は国人達の勢力争いに「守護」の権威が利用されているに過ぎない。

そして、結局この争いは双三郡の吉舎から南下した和智氏が勝利を納めた「上原和智氏」の成立となる。上原氏はこの後、西から勢力を伸ばしてきた毛利氏と結び、世羅郡一帯を支配する有力国人にのし上がる。ここには既に「大田庄」の姿はかけらもない。すなわち、国人上原氏の登場によって「大田庄」の歴史は幕を閉じるのである。

会報八四号の原稿募集

※原稿締切 六月二十日(土)

到着分(必着)まで

原稿は本文「一行一六字×一二〇行」でちょうど一ページです。以下三行毎に一段になります。写真がある場合でもできるだけ二ページ以内をお願いします。

四〇〇字詰め原稿用紙を使用する場合は、下四字分を空白にして一行一六字にして書いてください。編集が非常にやりやすくなりますので宜しくお願いします。

編集時間の都合で締切以降に到着した原稿は掲載できない場合があります。なるべく早めにお送りください。皆様の力作を宜しくお願いします。

古墳めぐりに参加して

曙小学校6年 藤川真一

「すごい。本物の古墳だ。」

ぼくは、生まれて初めて、本物の古墳をみました。

ぼくは歴史が好きだから、こういうことは、あらかじめ、知っていました。

でも、古墳めぐりで、もっと詳しく知ることができました。

六つ塚古墳群・四つ塚古墳群は、さがすのが大変でした。

畑の中や、木や草のかけ、石垣、など、ややこしいところばかりにあるんだもの。

でも見つけられた時は、うれしかったです。

げん室だけで、土でもつてあるところはなかったけど、中に入ったりできて、感激しました。

奈良県や福岡県だけじゃなくて、福山の町にも、りっぱな貝塚や古墳があるんだなあと思いました。

見たぞ！ 天津磐境

曙小学校6年 藤川真一

見上げると、首が痛いような巨石

昔、人々が、神の下りて来る場所として、大切にしてきた天津磐境。

周りの石に比べて、一きわ目だっているこの岩に、本当に神はまいるってきたのだろうか。きっとそうにちがいない。と思う。

今まで見に来た岩の中で、天津磐境が一番神秘的だからだ。

下に石がななめにおいてあって、とても自然が作ったものとは思えなかった。

ガイドのおじさんが、「舟みたいに見える。」

と、言っていた。ぼくも、「確かにそう見えるなあ。」

と、思った。神様がおりこられる、神せいな場所。

天津磐境は、その場所にふさわしいと、思った。

山城志第15集発刊

領価一五〇〇円(送料310円)

- 備後宮氏の盛衰……………田口義之
- 杉原光房に関する一考察……………木下和司
- ヲホト王朝の謎……………佐藤壽夫

- 戦国三好党を訪ねて……………三好勝芳
- 他五編収録 B五版一七ページ
- お求めは会の会合で

雲井城跡への登城

小島 袈裟春

本来はこの様な堅い題名ではなくもう少し気軽に、城跡を訪ねて、とか、探訪とか、分かり易い題名が私の好みなのであるが、此処ばかりは特別の思い入れがあつて改まらなくてはならない。

私が「備陽史探訪の会」に入会して間もない、一九八八年（昭和六三年）のバス例会「宮氏を訪ねて」に参加した時、当時副会長だった田口義之先生が、其の宮氏と山内氏が戦つた永祿二年（一五五九年）の篠津原、団司河原の決戦を興味深く話され、その上で雲井城中腹から篠津原にかけての広大な地域に存在している教知れぬ程の石垣や郭跡の事を教えて下さつたのであつた。

今は誰一人住まない原野に残る中世の遺跡、かつて賑やかだつた町の跡が落葉や灌木に覆われて眠つてると云うのである。山中の「草戸千軒」ではないか、と私の心は踊つたのであつた。

家に戻つてからたまたま手元にあつた平凡社の「広島県の地名」から庄原市（武田祐三著）の項を引い

てみると雲井城周辺の解説がかなり詳しく記述してあるではないか。

以後星霜十年、一九九八年三月二十九日を心待ちして居たのである。低気圧の通過で降つていた雨は前日の午後にながって、当日は風も穏やかに探索日和であつた。

芸備線の「高」駅前至今已日の登城のご案内をして下さる地域史研究家の武田先生が待ち受けて居られた。

標高六五四米の雲井山は高駅の東方に標高四五三米の竜王山に遮られて八合目辺りから上の特異な山容が見える、駅からの比高差は約四〇〇米位との事であつた。

往路は竜王山の南側から谷合いの山路を左に廻り込む様に登つた。途中に篠津原方面に通じると云う中世の道路跡があつた。敵を迷わせる為小尾根を掘崩して広い回り道を作り突き当りに石塁を設けた施設もあつた。楯形の虎口も何箇所も見た。

中腹の郭跡が尽きる当りから急勾配の九十九折りの小道になつた。小休止四回、雲井山城跡の第二郭に辿り着いた。長さ六〇米巾一五米、北端に高さ二・五米程度の見事な石垣がある。それを登り更に四段程の石垣と小郭を過ぎて最高所の主郭に登り着いた。麓の高駅から二時間余りの行程であつた。

主郭は縦横二十米程の不整形の郭で中心に径二米位の石積の井戸跡がある。南に一段下つて東西に長い郭が主郭を半周し南東に犬走りが付いた二段の郭がある。主郭の北西にも二段程の郭が作られ急峻な山肌が主郭の西北東を遮つていた。

この山城の縄張りには最高所の主郭から南西に下がる尾根を約二百米に渡つて、順次に巾五から十五米、長さも五から六十米と、段階的に削平した比較的単純な構成であるが、立派な石垣を多用して郭の区切がなされて居る事が大きな特長と云える。

説明に依ればわざわざ近畿方面から石職人を呼んで積ませたのだそう。図面では主郭の南に長大な縦堀りが記してあるが見学は出来なかつたし、図にも他に縦堀も堀切りも見えない事が気になり、又第二郭以下の他の郭も危険が伴うため見学出来なかつたが、此の山城の周囲は急峻で谷底が深い事を考えれば縦堀などは不要かも知れない。

さて雲井城には北西一軒の所に支城と云うべき標高四七四米の福山城が存在する。この山城も中々の要害である上、西山麓は備中新見路と西城川が流通して中世は市場が栄えて居たと云う、即ち国境と交通と経済を一手に管轄出来る重要な場所

に築城されているのである。

福山城は其の立地と、大規模な堀切は数あるが図で見る限り石垣がない所を考えると、この城が先に出来て居て、雲井城はその跡の築城であろうと私は考える。

さて此の福山城から南に、竜王山（標高四三五米）と雲井山腹を経て篠津原に至る南北二軒余り東西0・5×0・7軒余りの広大な原野の中心に残る石垣、郭跡、館跡、道路跡、は何を意味するのであろうか。勿論二つの城を守備する武士達が居住した屋敷跡である事は間違いないが、もしこれらの遺跡が同時に機能して居たとすると、問題がある。

バス例会の講師、木下和司氏作成の資料に依れば鎌倉時代に地毘庄の地頭として入部した山内首藤氏が、南北朝期、南隣の信敷庄を手に入れ其の東隣の將軍家御料所、永江庄と高郷に狙いを付け、管理していた宮下野守家が天文十年に断絶した時を好機として手に入れ、宮家の跡職を継いだ久代宮氏との抗争の原因となつたとの事である。

今回見学した雲井城は其の高郷に築かれ、久代宮氏の西城と境を接する所であるから当然、厳重な防備体制は必要である。が先に問題提起した様に規模が大き過ぎる。

山内氏の本城、甲山城に比しても格段に規模が大きい。

先に出した「広島県の地名」に、山内氏の全盛期頃惣領家の後継に雲井城主が介入し謀殺されたことある。

惣領家に取って替ろうとの野心を持つ程の勢力を貯えて居た、と云うことである。

さて私は念願の雲井城への登城を果たす事が出来て満ち足りた心である。その気楽な気持ちのままに、あの遺跡の謎を考えて見たい。

其の一、私は雲井城あたりから南の大目黒山の西側、谷山川上流付近一帯で砂鉄の採取、云う所の鉄穴流しが行われその職人達が住んだ跡も含むと考えて見た。それにはその地層の砂鉄含有量の調査と共に、「たたら」の跡が有るのが、問題なのが南隣の本村では鉄の生産が行われているので「たたら」はそちらかも知れない。

其の二は、兵農分離の問題である天文年間頃の軍団の編成は、武士としては家臣達とその直属の家来達であって、戦争の時は知行地の農民を狩り出す、即ち兵士の大半は普段は農民なのである。

こうした編成に対して始めから兵士として雇い入れ、給与を支給して軍団の主力として編成し、機動力を

高めたのは織田信長が嚆矢だと云われ、それは天文末の事である。

その観点から雲井、篠津原の遺跡群を見ると農業生産力の殆ど無い山中に蟄集している居住遺跡は農民以外の者、即ち專業の兵士軍団が居住していたと考えられる。

もしそうだとすれば、例えば同時代頃活躍していた山陰尼子氏の新宮党の如き存在かもしれない。もし山内氏が此の時代すでに專業の武士団を組織して居たとすれば、專業軍団は織田信長の考案とばかりは云えなくなる。

其の三、永祿二年(一五五九年)六月東に境を接し西城の大富山城を本拠とする久代宮氏の当主、宮景盛が山内氏の支城、この雲井城に果敢な攻撃をかけて来たのであった。

その戦いを「篠津原、団司川原の戦い」と称するのであるが、実はその六年程以前から宮氏も山内氏も、安芸の毛利氏の勢力下に属して居ていわば味方同士なのである。それを承知で宮氏がこの暴挙に出た背景に付いては「備陽史探訪の会」会報第八十号に会長の田口先生が分かり易く検証し執筆されて居るので是非とも読んで頂きたい。

尚都合上結果のみ記すと宮氏は後半力負けして敗れ、主将宮景盛は命

からが大富山城に引き揚げたのである。又作戦の一部分も先生の文からお借りすると、宮氏は七百人の兵を二手に分け、一隊を北の団司川原から攻めさせて山内方の注意を引き付け、景盛引率の本隊は遙か東を迂回して信敷庄本村に出、南の篠津原から攻め込んだと云う。作戦は大成功であったが、雲井、福山の両城を落す事は出来ず、其のまま団司川原に切り抜けて兵を纏め、大富山城に逃げ帰ったと云う。

先にも引用した「広島県の地名」に依れば福山城北麓の世尊寺付近に其の時の敵味方の死者を葬った千人塚が現在も残っているとある。

以上の事から推定すると当時は篠津原方面の防備は手薄だった、と考える事ができ、山内氏はこの苦い経験から其の後に篠津原の館群を整備したとも思える。

以上は冒頭に述べた私の思い入れと共に今回初めて其の一部を見学したのみで、全体像が把握出来るものでもない事は重々承知の上で直観的な感想を記してみた次第である。

さて御案内を頂いた田口会長始め役員の方々にお礼を申し上げますと共に現地の御案内を頂いた武田先生にも感謝せねばならない。

それに本文中、再三引用した「広

島県の地名」の比婆郡と庄原市を執筆されたのは他ならぬ武田先生だった事を後で知り誠に恥ずかしい次第である。尚、本会の出内先生も同書の神石郡を執筆なされている事も書き添える。

終りに書き添えたいのは此の探訪は昨年十二月に計画され実行したが雨止まず、登山点の「高駅」前で、役員諸氏が慎重論議の末、目的変更をした経緯がある。

其の際は山の状況を知らぬ所為もあって不満の声も有り、実は私もその一人であったが今回登城探索して見て、山沢多く水多く、道は灌木草に覆われ急坂は滑り易く、足元も定まらずと、並大抵の山ではない事が良く分かった。

もし前回強行していたら、と背筋の冷たい思いで、誠に赤面の至りである。

それに全山入山禁止、気軽に行ける所でもない事も分かりました。役員諸氏の尊い御決断に深甚の敬意を表します。

一九九八年四月

真瀬氏と菖蒲城

松岡 正三

「西中条村誌」や「神辺町史」には、菖蒲城が西中条 深水奥の東方山頂に存在していたことは、明記されているが、その詳細については、判らなかつた。

ところが、最近になって「真瀬中条記」を手に入れることができた。それは真瀬良胤から重宣までの十四代の記録であるが、重宣一代のことは存命のため、書かれていない。重宣の父 重良が天正十三（一五八五）年七月に亡くなっているのので、慶長年間（一五九六―一六一四）に書かれたものらしい。

それを基に、みだしのことについて、纏めてみることにした。

I、真瀬良胤、鎌倉から大和を経て、中条へ

真瀬良胤は、治承四（一一一八〇）年に鎌倉で生まれる。桓武平氏の末裔である。和田合戦の際、建保元（一一二二）年に鎌倉を逃れ、和州吉野の奥の十津川の辺りに漂泊する。宇智郡二見村（現 奈良県五条市二見）

の岩内平太盛江を頼み、真瀬山に隠蟄する。

承久三（一一二二）年四月、後鳥羽上皇は北条一族を亡ぼさんとし、院宣を下す。（五畿七道の武士に対し）良胤は急ぎ京に上り、官軍に加わる。四月二八日従五位下に叙せられ、掃部之介に任ぜられる。和州宇智郡地頭職に補せられる。家の氏を真瀬と改め、真瀬山に城を築き、四年間を過ごす。

良胤は宇治瀬田へ向かい、北条軍十万余騎と戦い、官軍は敗れた。後鳥羽上皇は隠岐へ、土御門上皇は土佐へ、順徳上皇は佐渡へ流される。（承久の乱）良胤は官軍が敗れた際、丹波を経て、備後国へ逃れ下り、中条村寒水寺の恵順阿闍梨を頼り、隠蟄する。（良胤の母方の縁者なり。）

良胤が中条に来て、宣胤・重胤・宣常合わせて一〇七年が経過する。それぞれが平家の侍の娘を娶り、常重の時代になる。良胤は、仁治三（一二四二）年二月に没する。

II、真瀬常重、船上山へ馳せ参ず。その後尊氏の配下に

真瀬常重は、正慶元（一三三二）年三月、後醍醐天皇が元弘の変の責任により、隠岐の島へ流され、翌 正慶二年三月に密かに天皇が名和長年を頼り、船上山に入られることを聞き、馳せ参ずる。

山陽・山陰の武士は、悉く馳せ参ずる。同年五月には、足利高氏は北と南の六波羅を攻め落とし、新田義貞は相模入道高時一族を攻め滅ぼす。同年六月天皇は京都に戻られる。

建武二（一三三五）年七月、相模二郎時行（高時の子）追討の勅命を受けた高氏は東国に向かう。その時、天皇より尊の字を賜う。一説には正慶二（一三三二）年八月、従三位武蔵守叙任の時、賜うともいう。

尊氏東征に際し、真瀬常重は尊氏の配下になる。遠江・駿河・伊豆・相模における十数回の合戦で、時行を討ち負かす。尊氏は征夷大將軍になり、新田義貞に難癖をつけるようになり、天皇は勅して、義貞に尊氏を討たさせる。

延元元（一三三六）年正月、尊氏東国勢を率いて大軍で攻め

上るため、義貞・楠木正成・長年等、大渡・山崎・宇治瀬田で防戦するも、官軍利あらず、天皇は比叡山へ。官軍は、阿三度京都へ攻め上り、尊氏を討ち負かす。

尊氏は、豊島（てしま）の合戦にも敗れ、九州へ逃れる。真瀬常重は、この時の合戦で、負傷し中条へ帰る。急いで、「とこなつ」の山に城郭を構え、「あやめ」の城と号し、そこに立て籠る。

III、菖蒲城について

延元元（一三三六）年三月二日に城取地祭、鍬始めを行い、同年五月六日に完成し即日移る。従って、「あやめ」の城と名付ける。凡そ方三十間（五四・五〇）の平坦面があり、更に上部が平らで仰視するような巨岩が西隅にあつて、自然の「人呼びの丘」をなしていた。ところが昭和三三（一九五八）年に巨岩の粉砕が行われ、本丸の大半も東部から取り崩れており、数年も経たない中に「人呼びの丘」は姿を消すだろう、と「神辺町史」には述べている。

南方には、約十間（一八・二

（延）に三間（五・四五）の曲輪があり、北方には、岩石の累々とした障害地点をおいて、約三間（五・四五）四方の曲輪が、三箇所存在する。

この城は、天文七（一五三八）年七月八日、真瀬出雲守信直が戦いに破れ、自害し城が焼滅するまで、二〇二年間存在したことになる。

IV、再び真瀬備中守常重のこと

尊氏は、筑前の国多々良浜の合戦に勝って、九州勢を味方につけ、大軍を率いて攻め上る。延元（一三三六）年五月、兵庫の合戦では、鞆の津より陸路攻め上った左衛門督直義の配下に、真瀬常重はなる。

官軍は利を失い、湊川で楠木正成が自害し、新田義貞は敗北した。尊氏は天皇を欺き、花山院に押し込める。

これからは、天下は足利の時代となる。

康永二（一三四三）年二月に、常重は將軍御教書を賜り、中条村地頭職に補せられる。唐団扇の紋を賜る。貞治三（一三六四）年八月六日没する。

V、真瀬出雲守信直のこと、その子 重良のこと

真瀬常重より、信正、重清、重兼、重氏、重時、信包を経て信直に至る。

その間、真瀬氏は尼子方であった。信直の代になって、大内勢に攻められ、妻於イノとともに、城に火を放って自害した。その子、重良は僅か八歳であったが、乳母に付き添われ、久佐村の檜崎三河守豊景を頼って行き、泰源左衛門尉光行に預けられる。天文一七（一五四八）年八月一日に元服する。この時重良は一八歳であった。烏帽子親は、長大蔵左衛門尉元親であった。父親の信直と朋友であったからという。

天文二二（一五五三）年九月二五日に、泰光行の娘と結婚する。光行は病氣勝ちで家督を弟親国に譲る。大永三（一五二二）年には、親国は、尼子経久に滅ぼされる。

天文二三（一五五四）年九月一日、重良は始めて芸州折敷畑の合戦に臨む。陶晴賢は、毛利元就が大内義隆の弔い合戦を仕掛けて来る、と察知して折敷畑に攻めて来たのである。それ

より先、天文二〇年八月に、大内義隆は陶晴賢の謀反に遇い、山口を逃れ、長州深川の大寧寺で九月一日に自害している。その跡目として、豊後の大友宗麟の弟、義長を継がしている。

重良は、五尺七寸（一七六センチ）の大男で、腕力抜群であったという。元就の勝利に終り、論功により給金一〇貫を拝領し、名も一字貰って、元朋と改める。

弘治元（一五五五）年一〇月晦日の厳島の合戦では、小早川隆景の配下となり、武勇を顕す。芦田郡鶴飼村で二〇貫の所領を賜る。二日後の一二月二五日に、小早川隆景は元朋を所望し、翌二六日には六〇貫の加増を隆景は元就にお願いして、元朋は合計八〇貫の所領となったという。

永祿二二（一五六九）年九月二〇日、筑州立花の城攻めの時の武功により、鶴飼村一円を賜る。天正一三（一五八五）年四月二八日、予州金子の城攻めにも、名を轟かせたが、傷を負い、小早川隆景に惜しまれながら、七月六日息を引き取った。墓所は小林山にある。

真瀬常重より信直まで、中条の高 二一七貫余り、石高にして一〇八五石余りを領していた。信直のあとは、宮庄五郎若狭守が、城山跡に楼閣を構えて居城する。

VI、再び真瀬信直のこと

その後中条は、延宝四（一六七八）年九月二八日に、西と東の両村に分かれる。

とところで、天文七（一五三八）年七月八日に自害した真瀬信直は、生前信仰心が厚く、享祿二（一五二九）年四月に始めて寺を建立し、興福院と号する。

真瀬氏滅亡後は、興福院も頽廢したが、再建の施主が現れ、遍照寺と号し、再建された。広山寺の末寺となる。

ちなみに、真瀬信直の戒名は、興福院椿寂寿長居士である。

遍照寺は、山城として宮一族の居城となる。

なお、真瀬良胤から真瀬信直までの十二代の石塔は、寒水寺にある。しかし、真瀬和泉守信包は討ち死しており、出雲守信直は自害しておるため、死骸は葬らず、石塔のみであるという。

（平成九年九月十一日記）

諏訪の神を考える

門田 幸男

今年寅年なので諏訪神社は、今御柱祭で賑わっています。この祭には陽の半サイクルの始めの寅と陰の半サイクルの始めの申とが選用されています。何かと云えばすぐ陰陽説を持ち出す。外の話はできないのかと思う方もあるでしょうが、諏訪神社をはじめとして、まだまだ陰陽説は生きています。

さて、下社には春宮と秋宮があり旧正月寅の月には春宮に、そして旧七月申の月には秋宮にお移りになります。春宮は西北に在り、秋宮は東南にあって陽の季節は陰の方角へ、陰の季節には陽の方角へ移る訳で、陰と陽にかたよらずほど良い調和を計っていると云う訳です。御柱にまたがって崖を滑り落ちる光景に目も心も奪われますが、御柱とは一体何を表すのでしょうか。その先端を三角に削っているのは、雨を浸み込ませない利点もありますが、それは現代の考え方であって蛇の頭(蛇、特に毒蛇の頭は三角形をしている)の造形だろう(吉野説)と云われています。

祭神の名前のタケミナカタは水方

(渦)と書きかえる事が出来ます。竜蛇が水神とされているのと合わせるとそうなる訳です。冬期土室に模造の蛇を籠らせる神事(①)もあつたし、蛇の好物蛙狩り神事(旧正月元日)もあります。祭神の好物であるかどうかはさておき、水棲動物の蛙を弓矢で射殺し、そのあげく串刺しにするなど念入りな殺し方は、蛙を代理として水気の冬を抹殺しなれば春はやって来ないとの考え方による呪術でもありましよう。鱷を殺して屋外に追放する節分も同じ思想によるものです。

御柱の話に戻ります。その長さは五丈五尺から四丈まで。五と云う数にこだわるのは五黄土氣(中央)の五を表すのでありましよう。諏訪が(本州島)の中央である事は天武の時代、既に意識されていたようであります。また、宮地の四隅に立てられた御柱の中はその又中央の聖なる大地(天は円く地は方(角)形)を意味します(②)。昔は大地が不動のものとしていましたから「この地を除きて他処に行かじ」と云ったタケミナカタの言葉がうなずけましよう。(地主の神(③)として呪縛されたと云う事かもしれませんが)

宝殿と呼ぶ)が二つ並んで建っています。寅年造宮の神殿と申年造宮の神殿です。陽の寅年造宮の神殿には七年後の陰の申年に入り、陽の寅年には七年前の陰の申年に造宮された神殿に入られるのです。徹底して陰陽の調和を計っているのですが、日(陽)照と降(陰)雨が均衡のとれた天候を願う心も伺い知る事が出来ます。諏訪の神は、持統五年に風を司る神として竜田の神(奈良県)と共に祀られています。諏訪の神がなぜ風神とされるのかは易の理に依っていると考えられます。八卦の中の巽(自然現象では風を表す)の位置は東南(辰巳)です(後天易)(④)。この事からも諏訪の神が蛇と視られる事が分かります。

結論、巽の位置の東南は九星では四緑木星と呼び、五行では木氣に当り、その木氣には蛇(鱗族)と竜が割り当てられていますから木の御柱は諏訪の神の形象(手も足もない一本の棒の蛇)を表現していると云われるのが納得できます。

能登の鹿西町にある諏訪神社の神木タブ(タモ)の木には毎年旧八月酉の月に鎌が打ち込まれます。それで鎌宮と呼ばれています。神木がなぜタブの木かと云えば「老木になると樹皮がハガレ落ちる・植物辞典」から脱皮新生する蛇に見立てられたのでありましよう。ではなぜ鎌かと云えば、大きさが手頃で扱い易い事と蛇の鎌首と云うように蛇の造形と見られる事などでありましよう。この鎌の刃先を外に向けて打ち込まれるのです。風神としてのタブの木に刺して暴れるのを防ぎ、外向きの刃で吹いて来る自然の風を切り裂く作用を風神の蛇の造形の鎌(金属製)を使い、金剋木の理(⑤)によって木氣の風神(蛇)が負けることにな

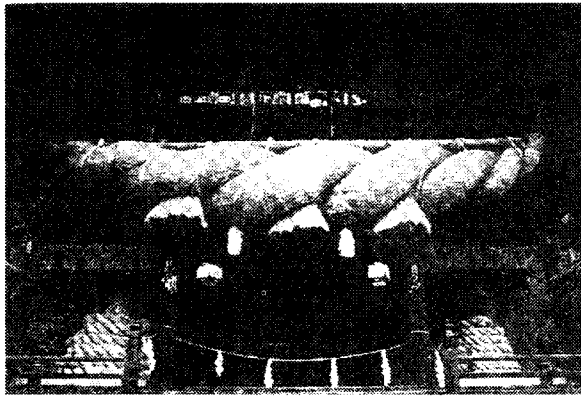


▶右半分の樹皮がはがれ落ちている鎌宮諏訪神社の鎌打ちの神木

る金気の酉の月に行う風神の威力を
使つて風を抑え込む超省力的と云う
か舌をまく巧妙なやり方で風神も顔
負けする呪術です。

【補注】

- ①段々大きいのに取り替える。
- ②諏訪湖の形も方形である。
- ③蛇は地中に穴居するので地主の神とされる。
- ④上社は諏訪湖の中心から東南に位置する。
- ⑤金属製刃物（鋸、鎌、鉞等）で植物は切り殺される理屈。



▶下社秋宮ス八大社の蛇の造形。

映画 “タイタニック”

石井 しおり

往時、世界の海運界に君臨していたイギリスにおいて、著名な造船会社超豪華客船タイタニック号を建造した。

その船が、満員の客を乗せて処女航海の四日日夜半に、冰山と衝突、船体が真っ二つに折れて沈没するという、衝撃的事故に見舞われた。

時に一九一二年四月十五日の未知の旅の目的地であるニューヨークの手前ニューファンドランド沖合での出来事である。

邦貨で二四〇億円という巨費をかけ、三年の歳月を費やした、その悲劇の大作映画を、昨日、見る機会を得た。

この映画は前評判も大変なものだったらしいが、世界各地で空前の興行成績を上げているという。

メガホンを採ったジェームス・キャメロン監督が、この海難の為に、一五一七名の尊い命が失われたことを忘れないで下さい。と述べているのも印象的であった。

全長二六八メートル、三年の建造

年数を要した三層構造の船体は、当時ではもつとも進んだ科学と、高度の先端技術を駆使したもので、幻の城塞ともいえる威容を誇っていた。ガラス張りの天井からは陽光が燦々と差し込み、プール・スポーツジム・テニスコート・サウナまで備わっている。なお豪華なラウンジ・レストラン・ナイトクラブ・カフェなど。その他あらゆる所に、ロココ・バロックなど、様々な装飾や備品が揃えられてあった。

船底には、造船史始めての二重構造が導入されて、船体に十五の防水隔壁を装備されていた。従って浸水しても直ぐには沈まない。不沈艦とさえ信じられていたという。

運命のその夜、付近を航行する汽船カルフォルニア号から、冰山警告の無線傍受をしていたにもかかわらず、雑事に追われて無視したまま時が過ぎる。やがて甲板の見張り員が肉眼近く冰山を発見、船体を急旋回する命令が操舵手に飛んだが、時に遅し。

船底に六カ所以上もの亀裂が生じ折角の防水隔壁も何の役にも立たなかった。

パニックの中で急遽救命ボートが降ろされた。船の美観を優先したために、定員の半分しか積載していな

かったことも、一層、恐怖心に拍車をかけたようである。

乗組員は、先ず女・子供の避難を指示する。咄嗟に女装してボートに乗る男もあり、既に発狂した人さえあったという。

その極限状態の中で、ヒューマン否、ヒロイズムに富んだエピソードも少なくなかった。

新婚旅行から帰途の富豪が、故郷ニューヨークを目前に妻をボートに乗せた。そして自分も乗っていかと乗組員に尋ねたところ、ボートにまだ席が残っているにもかかわらず「ノー」と宣告され、妻をじつと見送り、最期の刻を待ったのである。

世界最大の百貨店経営者夫人は、一旦救命ボートに乗りかけたが、もとに戻って、夫にこう語った「今ままで、ずっと一緒にやってきたんですもの、あなたと共に私も逝きます」と手を携えて船室に入った。

大統領の軍事顧問であった大佐とその友人は、船が沈んでゆくことにまるで無関心のように、大胆にも、テーパーを囲んでくつろいでいたそう。

アメリカ鉾山王の孫クッゲンハイムは、ボートに乗ることができないと分かると、自分の船室に戻って、救命胴衣を脱ぎ「どうせ死ぬなら神

士らしく」を夜会服に着替えて甲板に現れた。

一等船室のハドソン夫妻は、子供二人を乳母に託してポートに乗せ、夫人は夫の傍らに引き返した。

日本のミュージシャン細野晴臣氏の祖父正文氏のように、船室から甲板に出たところを「もうあと二人乗れる」という叫び声に、辛うじてポートに飛び乗り、九死に一生を得たという幸運の生還もあった。

不沈船といわれ、エドワード朝の技術の粋を集めた豪華客船の何ともいうもろさよ。

あらゆる階層のものが同じ条件の中で一緒に沈んでゆく。

それでも生存率の順位は、一等船室六〇%、二等四四%、三等では二五%に過ぎなかった。三等船室は倉庫と隣合わせで、沈没のぎりぎりまでゲートが開かなかつたと云われている。

パニックの甲板で、バイズル神父が集まった三等客船の告白を聞き、罪の許しを与えていた。別の甲板の一角では、船付きのバンドが最後の演奏を始め、人々への挽歌を贈るその姿が、茫茫として今も忘れることができない。

映画「タイタニック」を観終わってしばらくは、サーチライトの探索

する暗い波間を彷徨い、自分を失ってしまったていた。

生きるといふことの不確かさゆえにこそ、運命という一瞬の閃光を、明るく捉えて生きようと、思わずにはいられない熱い感動が胸に潮騒のごとく迫ってきた。

書籍のご紹介

『黄泉の国』の考古学

少し先の話ですが、八月二十二日(土)に広島県立歴史博物館と共催で特別歴史講演会「他界は何処―古墳文化の本質―」を開催します。従来、都出比呂志説(前方後円墳体制)を代表する政治的所産物とのみ捉えられてきた前方後円墳の解釈に、全く新しい視点を導入したのが講師の辰巳和弘先生です。先生は同志社大学歴史資料館の学芸員をなさっていますが、近年、『埴輪と絵画の古代学』『高殿の古代学』『地域王権の古代学』と立て続けに著作を上梓され、いま日本で一番注目されている考古学者です。さて、今回、講演会の予習として先生が一般向けに書かれた『黄泉の国』の考古学」を事務局で販売します。

※連絡先
平田事務局長宅(九〜十時)
☎0849-123-3781

古墳めぐり

曙小学校5年 藤川 亮介

5月5日に金江の所にある古墳、松永湾の近くにある馬取貝塚に行きました。

初めに行った場所は、元祿塚です。元祿塚は、横穴式石室で、げん室と通路がいっしょになっている古墳です。

中に入ってみたらあまり広くはなかつたけど、今日見る古墳なかでは一番大きいという話でした。

次に行った場所は、六ツ塚古墳群。四ツ塚古墳群、天津磐境(立石)です。

六ツ塚、四ツ塚古墳群は、共にあちこちにあつたし、草や木が、いっぱいあつたので、見つけにくかったです。

六ツ塚古墳群の中に、家族が死んだら、同じ墓(古墳)にいれるという、ぼくがまったく知らない話もしてくれました。

天津磐境は、十メートルくらいある大きな立石です。

これは、昔の人が、神様がおりてくる場所として目印になる岩です。他にも、大きな木、きれいな池、湖が神様がおりにくる場所になって

いたそうです。最後に見学したのは、西の塚古墳と、松永湾の近くにある馬取貝塚です。

西の塚古墳からは鉄滓が出てきました。塩と鉄を持っている国は、強い国です。

おそろくこのリーダーは、きびの国の王に仕えていたんだろうと言っていました。

馬取貝塚は、すごい貝がらが捨ててありました。

いっぱい貝があるということは長い間、ここにいたんだろうと、話してくれました。

いっぱい不思議に思ったり、理解したりして楽しかったです。

第七回郷土史講座 津山盆地の古墳について

秋の古墳巡りは津山盆地周辺の古墳(宮山古墳群、火の釜古墳、三成古墳等)を見学します。事前にしっかりと勉強しておきましょう。

- 《日 程》七月二十五日(土)
- 《開始時刻》午後二時
- 《会 場》福山市中央公民館 会議室
- 《講師》山口哲晶さん
- 《参加費》一〇〇円程度

村上水軍と歌島の砦

柿本光明

城郭を築くとき山岳を利用したときを山城といい、平野に臨む丘陵を利用したときも平山城と呼ばれる。山城は大化改新のころから、平安・鎌倉時代を通じてよくみられた。このころは平常の居館とは別に天険を利用した戦時の山城が築かれていたが、平城系統の居館と高い山城とは次第に接近し、近世初頭にいたると大規模な平山城の出現をみるようになった。(日本史小辞典より)

向島古跡めぐり
一、玉の浦わの向島
廻れば七里七の浦
神武のみかどのむかしより
ゆきかう船も真帆片帆
鏡の海に浮かび出て
ゆかりも遠し三千年

四、白砂老松うつるえる
浦浜明神岩子島
旭將軍義仲の
忘れ形身の義重が
覚明どのに連れられて
隠住居の川尻郷

五、大町、余崎、小歌島城

とりでも多き浮島の
いにしえ事をしのばるる
加島、海物両園は

世にも聞こえし庭という
今は昔の名残のみ
(二、三、六を略す)

この「向島古跡めぐり」にも、うたわれているように古城の趾やとりなども沢山ある。

尾道駅前のフェリー乗場より海を隔てこんもりと樹々におおわれた小島が見える。これが小歌島(オカジマ)である。一衣帯水の小島といおうか、昔向島を歌島と称したのに対しこの島を小歌島といふ通称岡島とも書く。昭和初期までは周囲六〇〇Mで全島樹木うつ蒼としていたが明治初年伐採し、桜、梨、桃などを植え、春は百花爛漫、尾道港に入港する船の案内に白亜の灯台も設けられていたこともある。

戦国の時代この島も村上氏の領域の内にあつたので当時、城の守護神として宇迦神を祀つたという。今では正殿一間四方、拝殿桁行二間、梁一間半の弁財天と俗称している。

「芸藩通志」「芸備古跡志」「六郡志」「芸備叢書」などなど、みな村上治部少輔とその子又三郎吉満二代の城であるというも「御調郡史」には、村上治部少輔勘安、同又三郎吉満、

同又次郎吉秋、河村撰津守影秀(明徳二年伯州より来たりて居城す)の居城趾であり、永い間居城したものと考えられる。この推定によると小歌島城の創始は明徳辛未年(一三九一)で河村影秀が伯耆国から来てから築城したものとみられるも当時の記録は見当たらない。その後久しく廢城となつていたが天文二二年丑年(一五五三)秋、村上又三郎義満の

海城として居城したに始まり文禄年間(一五九四頃)防州に去るまで約四〇余年間村上氏の居城であつた。もともと村上氏は義弘のころから因島中庄青影城に居城し、その全盛時代には海賊の大將軍として朝鮮、中国などをたびたびおそつたことは衆知のことであるが、正長のころから能島、来島の二族と共に瀬戸内海の三村上として倭魁の巨星として勢力をふるつていた。

この全盛時代に小歌島・余崎の各城に兵を配し尾道水道は小歌島城、和布刈瀬戸(メカリセト)を余崎城に見張りをさせていた。

弘治元年(一五五五)毛利元就に属して船舶数百隻を引き連れ一夜の内毛利勢を本土から嚴島に渡し水軍としてもよく奮戦し、元就から天下の義軍として褒賞されたという。この時代小歌島城、余崎城の兵士も

戦いに臨み船手として大いに活躍したものであろう。

弘治元年卯月七日附村上吉充は小早川隆景より向島一円を所領地として与えられて書状次の通り
向島一円之事任承旨致同心候以宇賀島一着之上可有御進退候神も御照覧候へ不可有相違候、弥御入魂此節候恐々謹言、
(弘治元年)卯月十日

小歌島の北の歌島(向島)で最高峰高見山(三〇〇M)の南東に突出た峰といおうか岬がある。現在は古木のうつ蒼として原始林のようにみえるが、この山頂に一社あり国常大明神を祀り国津神社と称するといふ
天文年代村上氏が因島・能島・来島の三島に拠り、小早川隆景を統帥として威を瀬戸内海に振るつた。村上新左衛門尉義光は、ますます東西交通の盛んな布刈瀬戸航路の見張所として天文年中にこの余崎の地に城を築かせた。小歌島城は尾道水道の見張り所として天文二二年に築いたといふから余崎城はこれより以前天文初年の頃だと思われる。

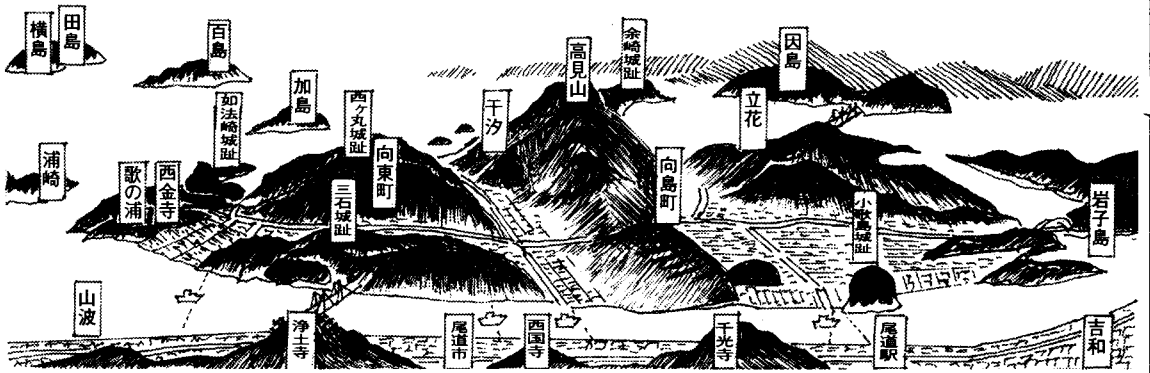
この城の菩提寺として金蓮寺を建立したと伝えられているが、後に因島中庄に移されたという。これが今因島中庄青景城の下にある金蓮寺で

ある。

つまり、村上新左衛門尉義光は因島重井の青木城に移るが木頃石見守経兼に不意討せられ、元尾道吉和の鳴滝山城主、宮地兵部少輔恒躬の子・大炊亮明光の次男家長・因島村上氏にたより、氏名村上を名乗り、後に鳥居家を継ぎ、鳥居次郎資長と改めたあとこの余崎城城主となった（現在尾道光明寺にある県重文、波切り観音像は船の舳（へさき）に祀られていたものを鳥居家が寄進したものである。）

その後、毛利氏が長州に去ったので廃城されたが、浅野氏が国主になってからこの地を遠見御番所として受け継がれた。

余崎城趾より海岸線ぞいに約四km東に行くと西ヶ丸城趾に辿りつく、西ヶ丸城趾（別名吉原城、大町城）は尾道市向東町字大町にあり、元弘元年未年の秋（一三三一）京都加茂斎院次官藤原親章の祖がこの地方を荘園地としていたため杉原氏を頼って大町山に隠城をつくらせたという。田村、秋長の輩士に命じ翌申年五月に出来上がったが藤原親章、大塔宮内窓隠謀により捕えられるを恐れ入道親行と称してこの城に隠棲し、康永二未年六月二一日七四才を以って



死去したと伝えられている。

その子藤原親清は足利尊氏に追われ山県の南方城に入り観應二卯年五月猿喰城合戦にて討死する。その子安親は本郷城を築き数代栄えたが明応八未年三月芸州銀山城の城主武田氏と隙を生じ追われて再び権現山城主杉原広盛を頼ってこの西ヶ丸城に入り、その子親冬は各地に転戦、その軍功はおびただしかったが、杉原氏の衰運、渋川氏が尾道吉和の鳴滝城にあってこの歌島を領すると、西ヶ丸城は杉原氏と縁故であることを知ってことごとく庄迫を受けた。しかし、その子豊後守元親、小早川氏を通じて大内氏の助けを得て、世羅郡内に杉山城を築いて移りこの地に一族を留めたと伝えられ、この城趾を中心に吉原氏を名乗るものが多い。

なお藤原親章はこの西ヶ丸城を築城すると共にこの地に小祠を建て鉾を献納故事にならって祀り、この神をもつて城の守護神とした。社殿を大いに修築し、神領まで附し現在は良神社と称してこの地（大町）を吉原氏は崇拝している。また西ヶ丸城（大町城）の出城として向島千沙に旧御台場の地としてあてられていた所もある。

西ヶ丸城（大町城）趾から海岸沿

いに四kmほど東に行くと尾道市古江浜という所につく、この古江浜の南東端に如法崎城趾がある。

毛利氏の旗下、小田小次郎景盛が築城したもので、天正二年景盛は伊予松山城攻めに参加し、その後讃州にも出陣するなど出陣するといつも戦功ありて小早川隆景より感謝状八通も受けたという。その後この地を去ったが一族の者どもをこの地に止めた後に小田原の氏を名乗らせたという、この地区には小田原を称するものが多い。

このほかにも、向東町の三石城趾、丸山城趾、伝馬ヶ岡（向東町字矢立荒神山の西方の丘陵）で、近海を通航する船に対し通行税を徴収するたためにこの地より伝馬船が出たという。

瀬戸内海や北九州の豪族達は「八幡大菩薩」の旗をかかげていたので「ばはん船」ともいわれ「倭寇」とよばれていた。倭寇の略奪は、一三世紀末から一四世紀（鎌倉時代末、南北朝争乱期）を前期倭寇といひ一五世紀末より一六世紀（戦国時代）の倭寇を後期倭寇といった。はじめは朝鮮半島の南部沿岸をあらし、しだいに中国大陸に移った。規模二、三隻から多いときには二〇〇隻、五〇〇隻にもおよんだとい

う。かれらは馬の代わりに船に乗った武士であると誇っていたという。因島の村上水軍もこの向島だけでもこのくらい城を造って運行税の徴収をしていたので「八幡大菩薩」の旗をひるがえしながら海外でも活躍したことであろう。

郷土史講座のご案内

『古事記』を読む

《実施要項》

※日程 六月十三日(土)

※時間 午後二時から。

※場所 中央公民館会議室

※講師 神谷和孝さん(名誉会長)

平田恵彦さん(副部長)

※テキスト代 一〇〇〇円(岩波文庫ワイド版「古事記」を使用)

※資料代 そのつと一〇〇円程度

中世を読む会

『備後古城記』を読む

《実施要項》

※日程 六月二十日(土)

※時間 午後七時から。

※場所 中央公民館会議室

※資料代 実費(百円程度)

神辺町(旧中条村)

『一对川』の名称について

鼓 正人

「旧中条村」(現神辺町)には北側から南方に向けて流れる河川が大小合わせて8本も流れている。それらの川は総て神辺町の中央をながれる高屋川に合流している。同川は芦田川に合流し海にそそいでいる。芦田川は国の一級河川のうち水質汚濁がもっとも進んだ川である。

神辺中条(旧中条村)を流れる川



- ① 堂々川
- ② 貝谷川
- ③ 深水川
- ④ 山田川
- ⑤ 箱田川
- ⑥ 今信川
- ⑦ 一对川
- ⑧ 六反田川

旧中条村にある川で一番東側にあ
る川は堂々川で、大原池付近を水源
に、大原池、淀池を経て流水してい
る。谷間を流れる堂々川は、度々の
洪水により下流は被害を受けた。特
に、天保7年(一六九四)頃の大洪
水で池は氾濫し土石流れで、国分寺
や付近の民家が流され死者がでるな
ど村は流された。住民の手での改修
は無理である。そこで福山藩も改修
に意を注ぎ、藩主水野勝種(4代)
が順次、「砂留」の砂防堰堤を築かせ
た。石垣を一見すると、その工法は
城の石組みの様で、半円形の石積み

にし絶対に崩れないように内部には
小石を敷きつめる等の特殊な工法で
施工し、特に6基目は大きな防堰堤
となっている。大原池付近には、「福
山カントリークラブ」のゴルフ場も
あり、中腹部には「堂々公園」も出
来ている、せせらぎも流れていて、
町の観光名所となっている。

その川の西側、山を隔て寒水寺山
付近を水源とした貝谷川が流れてい
る。同川には、深水川、山田川が途
中で合流している。深水地区、山田
地区の土地名が、即ち川名となつて
いる。平素は水は流れていないが、
土手下には小さな溝のような川があ
り水は流れている。

旧中条村のほぼ中央を流れている
一番大きな川、それが箱田川である。
平素水は殆んど流れていない。広
山寺付近上流で木ノ内地区の「池之
坊池」を経た今信川と合流し、大坊
新池東側を流れ、下流の箱田地区を
経て高屋川にと合流している。

箱田川は正式名称で、通称は天井
川と呼んでいる。

同川には殆んど水は流れていない
が、土手は県道三谷神辺線、町道梶
久才原線となっている。土手下両側
には小川が流れていて常に田畑を潤
し生活用水となっている。

箱田川は大雨で洪水となると濁流

に土砂が流れだし土手は崩れ、その度に土砂を取り除く作業を繰り返す。取り除いた土砂は土手に積み上げられ、川底や土手は田畑より高くなり天井川と呼ばれるようになった。その原因は、旧村の山には樹木が少なく、俗に云う「ハゲ山」だったのだ。現在その面影はないが、一昔前迄は、中条の「ハゲ山」は有名で神辺町や、福山市から夜間帰るときは、「ハゲ山」を目標に帰れば「道に迷うことはない」と云われた程である。

そのような状態だった為、ひとたび洪水に遭遇すると下流の箱田地区、特に千田地区は沼と化し、切角植えた稲も水びたしになり、二度も田植えをせねばならぬ悲惨な状態であった。

現在は汚水の濾過施設、新河川法による「環境の整備と保全」にもとづき、河川の拡張、池の堰堤、道路の改修などが施工されている。

それはさておき、私が特に興味を抱いた短い川がある。箱田川の西側、即ち、西中条川西の大坊谷を流れる「一対川」である(図面参照)。この川は全長360m位の極く短い川で、水源は二つあり、その一つは黄龍山(遍照寺山)であり、いま一つは加茂町に通じる谷合の通称「ケイ

ホウの河原」を水源としている。河原の下には砂止め工事が施されている。

重厚な石積みで、半円形で傾斜に5段積に重ねられている。その石垣の一部に、

「明治十五年八月

中以地方税砂留

五尺増築

戸長 金尾直樹」

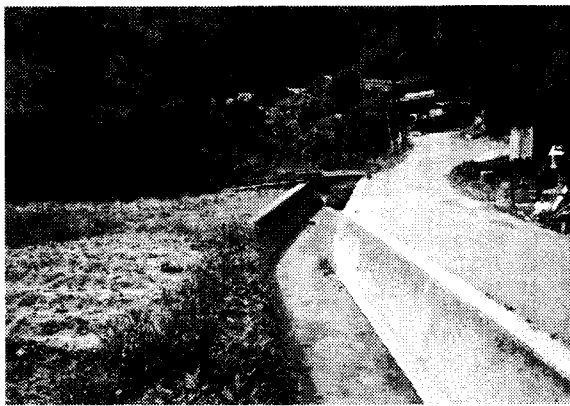
と刻されている。

(明治5年庄屋から戸長に改められ、明治22年町村施行、戸長を廃して村長)



▶左、右が1本の川になっている。

この石は道路西側の二段目の積石に刻されている。石の風化で判読は難しい。当時の社会は、明治6年地租税改正、同10年には地租税減額の緊縮財政から明治15年に税金による工事で、従来は地区の共同作業から、税金による工事の施行は注目すべき工事だったと思う。恐らく土砂の流出が激しく、被害も甚大だったと想像されるが、戸長金尾氏の功績であろうが、その工事は「増築」となっている、それ迄にも砂留はあるが、土砂の流出が多かった為で



▶左は黄龍山からの川、右はケイホウの河原からの川

あろう。砂留めの50m下流にもなだらかな石組で第2の砂堰があるが従前のままの様である。何れにしても公的補助金、税制度の確立の不十分な時代に施工されていることは特に注目に値する。二本の源流からの流水は別々の流れだった。その流れを変えたのは明治の増築の際か、或いはそれ以前に一本の改修し、池の両側を流し、堰を設けて池に流入させ、貯水池とし、南側の樋は大坊地区へ、西側にある樋は田淵地区へと逕流から流出する少ない水を共同で管理し、話し合いで分配していた。当時水は稲作にとっても飲料水としても生命であり、両地区は運命共同体であった。字典によると「一対とは二つが一組みとなること」とある。これが川の名称の語源になりそうである。私は古老からの伝え聞きで、「イチイガワ」と聞いていたが「一対川」と書くとは知らなかった。流れの状態をそのまま呼び名にした誠に当を得た川名であると推測し一人で納得している。大坊、田淵、安光地区は箱田川の西側にあるので、西中条川川西と言われている。

一対川の川下は昭和34年に改修工事が行われ、その記念碑は倒れたままになっている。一対川と箱田川の合流点は道路下を「トンネル」

状にくぐり抜けて道路両側に欄干がある。一風変わった珍しい橋である。赤褐色の角型石を南面に「一対川橋」、北面に「いつついがわ」と刻されている。

一番西側を流れているのが六反田川で、下流に六反田地区があり川の名称となっている。上流は渡瀬川付近を中心に流れているが土砂というより粘土質のような土が流出し、川底は沼のようになっていて、川の整備工事と並行して道路拡張工事も施工されている。環境の整備、特に水資源の保護に源流に目を向け、高屋川の汚染を防ぎ、芦田川の汚い水を清流にして海に流す。

山と川と海を結び、水質の悪化を防ぐ、水鳥や魚の住める環境づくりが大切である。生活排水や、工場排水からの汚染も放置できないが、源流から工事が進められている故郷の川を見て、自然との調和はどのように図られるのか、変化の少ない地域取り残されたような地区に新しく施行されつつある工事に、「天井川」や、「二対川」の文化財的名称に乏しい知識であれ想像し、その起源に思いを走らせ、郷愁を感じている。

(福山市吉津町四—一三)

江戸の面影

丁谷探訪

三谷尚克

変貌を逃げた神辺であるが、周辺にはまだ中世から江戸の面影が濃く残る地域がある。丁谷もそんな所である。神辺小学校が谷への入口に当るが近傍にもいくつかの史跡がある。

※三界万霊碑

幅三十三cm高さ二m碑自体はどこにでもあるが、このあたりの村では慶事に若い衆を呼び馳走をしたが、呼ばれなかつた者がこの碑を当家に担ぎ込み嫌がらせをしたと言うことが伝わっている。

※青石地藏

三界万霊碑の隣にあり首が無くなっている。又材質が脆く剥離が起きている。水野勝成がここで試し切りをした者の供養仏と言う話と、福鳥家改易の時、浪人となった堤弥惣なる者が、庄屋であった藤井広昌に神辺城の城米数百石を預けてあつたのを渡す様押し掛け争いとなり、弥惣は切り付けられ相方村に逃れた。後水野日向守入城の折り、両者は勝成の前で対決し藤井広昌に理有り、

褒美として太刀一振りと弥惣を受け取り、当時の川南村妙立寺脇で釣切にした。と二つの話があり、弥惣の供養墓とも思われる。

※石塚半三郎解剖記念碑

明治三十三年五月片山病で死亡した石塚半三郎の解剖を記念して建立された。半三郎は生前、自分が死んだら解剖してこの風土病の原因を解明して欲しいと言っていた。そして記念の墓碑を建てて欲しいといい残り、屍体の解剖などんでもない時代に、勇氣ある半三郎を記念して浄元寺跡に建立された。

※夜泣き地藏

昔、薩摩の大名の奥方がこの地で産気づき双子を出産したが、双子はお家騒動の元となるので泣く泣く一人をこの場に埋めたといい、夜々その子の鳴き声が聞こえて来ると伝える。他の伝えもあるが、子供の夜泣きに効くのでそばにあつた松の皮を剥ぐので枯れてしまった。その後地藏尊が建てられ浄元寺の一角にあつたが、道路改修で今は用水路の上に安置されている。

四つの史跡共に現国道の裏の山際を通る旧道に面した所にある。

※丁池と向山

神辺小学校の前の池を丁池、又は豊田池と呼ぶ。水野勝成の命で豊田

源右衛門が総奉行となり元和年間に完成した。尚、福山志料には周五町五十八間とある。又南に東西に伸びる山が向山。地元では専ら松茸山と呼ばれている。福山志料にも松茸山と出ています。

昔より良品の松茸を産出し、その為、水野家二代勝俊の時、御用松茸山として一般の人の入山は禁止された(丁谷八幡宮棟札) 明治まで続いた。この山の高い所は点々と古墳があると聞き、西の端から峠越えて隣の丙谷に通ずる頂上付近を探すと、崩れた石郭が一つ見つかった。

※廢妙立寺三体二石地藏

松茸山の裾には西寄りと中央部に墓地が二ヶ所あるが、中央の早田墓地と呼ぶ一角に廢妙立寺三体二石地藏が祭られている。法昌山妙立寺は日蓮宗。文明十八(一四八六)年九月、日親聖人開祖で丁谷に在ったが元禄五(一六九二)年紺屋町に移転した。

備陽六郡志にも載っている古寺で跡地から墓石等が出る事がある。

※宮方峠

早田墓地の東の外れに丙谷に通ずる峠道があり、宮方峠と呼ばれている。頂上付近は後出の丁谷八幡宮の古殿地があり、又、古丸山古墳(円墳)のある所である。峠の頂上に立

つと丙谷から来たと言う人に出会ったので色々聞いて見たが、良く分からないとの事。唯戦後、開拓により両方共破壊され、その後も今は放置され山林に帰っていると思われる。残念なことである。

※丁谷八幡宮。

東西に長い丁谷の中央のカカラ山に鎮座。棟札によると建立由来は次の如くである。

嘉吉三(一四四三)年(神辺村誌では嘉吉元年)十月、神辺城主山名近江守が鶴ヶ岡八幡宮を勧請し城の鎮守としたが、幾星霜を経て破壊された小社のみ宮ガ峠に残っていた。

寛永八(一六三一)年、主だった者が相談し丁谷には氏神が無いので由緒ある八幡宮をカカラ山に移したいと水野勝成に願ひ許された。杜家は長迫玄蕃季久(備陽六郡志)。その後、讃岐国塩飽の大工小森弥左衛門なる者、鞆津に居候を呼寄棟梁として社殿を建立した。時に寛文四(一六六四)年八月、参道の石灯籠は川南

庄屋八代藤井治郎左衛門昭房寄進で安永二(一七七三)年。鳥居は安永六年の銘がある。又、石段は一五一段。継ぎ目の無い立派なものである。尚境内から出た古瓦には「火」の字が入っており、以前は神辺城の裏鬼門に建てられたのに違いない。福山

城の場合も裏鬼門に当る明王院裏山に火伏せの神たる愛宕神社がある。

※丁谷梅林。

現在もある梅林も江戸時代には下・中・上と山麓にあった様で、幕末の皇学の権威者で歌人でもあり、又天別豊姫神社の神官でもあった鈴木秀満は「分け入れば袖も袂も香るなり丁の谷の梅の中道」とこの梅林を詠んでいる。現在もある梅林の真中には、文政七年廉塾に五日間滞在した頼山陽が管茶山と別離の情を七言絶句で詠み酒を酌み交した「茶山山陽饒飲の跡の碑」が建っている。

山陽はこの後京に向かったのである。この梅林の賑わいの様子は大正後期の写真にも写され残っている。又付近には広川の清水と呼ばれる泉が湧いていて先年の渇水時は重宝したそうです。

※廃龍興寺跡の単体六地藏。梅林の奥に往古龍興寺があったが福山城が出来た時、福山吉津に移されこの六地藏が残った。又鐘楼は茅葺きで丁谷の四ツ堂として残されたが、昭和初期の台風で壊れてしまいました。

帰りに際吉野公園で花見をして秀満先生を真似て詠んだ一首、「武士の猛き魂も愛でるべし吉野古城趾かおる桜花を」。

第6回郷土史講座

『記紀』と『万葉集』に

現れる故郷の神々

「古事記」には、火の神迦具土神を産んだため女陰を焼かれて死んだ伊邪那美神が、出雲の国と伯耆の国の境の「比婆の山」に葬られたと書かれています。この比婆の山は広島県の比婆山が伝承地として知られ、山頂近くには「伊邪那美神の御陵」と伝えられる線刻のある巨岩があります。また、岡山県奈義町の那岐山も伊邪那岐神とのかかわりがあると言われていいます。このように、古代の文献に登場する神々は、私たちの故郷と意外に深い関係があるようです。6月の郷土史講座では、柿本さんに長い年月をかけた取材の成果である古代の謎とロマンについておおいに語っていただきます。

《実施要項》

※日時 六月二十七日(土) 午後二時

※場 所 福山市中央公民館

※講師 柿本光明さん

※参加費 資料代として百円程度

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

神辺町に 葛原家旧宅を訪ねて

種本 実

福山市市民病院横の山道を下ると、まもなく神辺町に入る。桃の産地竹尋をぬけ、東に走ると八尋に出る。この、八尋という地名を知ったのは最近のことである。某新聞の読者サークルで知り合った方が、この地を住所とされていて、「八尋という地名は、他所からここを訪ねて来て、目的地に着くには八回も人に道を尋ねることになる所以から」と、面白く話されたのが印象に残っていてその後、何回も車を走らせ八尋を散策したものだ。

八尋に来るたびに、都市化の喧騒から一転、田畑や山林に覆われた、豊富な自然のこの地に言い得ぬすがすがしさを感じてならない。見渡す一面が田圃の頃、その田が黄金色に染まり周囲の梢の紅葉が目奪う収穫の頃 etc……、これは、よそ者の気まぐれな、田舎恋しさかも知れないと認識しながらも、車窓に目が奪われ、心が清浄される思いに駆られる。

広い農免道路よりも、狭いバス道路に往時からの生活の輪だちを感じ

られる。この道こそ、バス以前は二本の足のみが踏んだ、幾星霜もの人々の足跡が刻まれているはずである。しばし、タイムマシンに乗って思いを馳せる。

今日はそのバス道の一角に、訪ねてきた「葛原勾当旧宅」の案内板が目止まった。弘化二年(1845)に、勾当が建てた旧宅の門前の石段にはみずみずしいクローバーが群生していて、不意の訪問者の靴を埋めた。門には「葛原」の表札はあるが、崩れかけた土塀から伺うと、今は無人のようであった。近所の方に尋ねると、ご家族は東京に住まわれているとのこと。

旧宅前の「葛原しげる先生童謡碑」には彼が作詞した有名な、「夕日」の詩「ぎんぎんぎらぎら夕日がしむむ……」が彫られてある。立派な碑も、旧宅も今は著名な文化人二人の功績をひっそりと後世に伝えつつ、無言で建っている。せめて、血縁の方に見守られていればと忖度するのは、よそ者の感傷(干渉)か。

葛原勾当は、文化九年(1812)にこの地に生まれ、三歳の時痲瘡により失明した。爾来等曲の教授を受け、生田流の等曲の大家となったが、彼の発明工夫した木活字及び、それを捺字して綴った二十六歳から(代

筆によるものは十六歳から)七十一歳まで(明治十五年)の、「葛原勾当日記」は神辺を代表する文化財の一つである。

木活字は当時京、大阪など都会では普及していたようだが、彼は木活字の左右の側面に横線を引き、いろは四十七文字と撥音、数字などを指先の感覚で識別する工夫を施した。この木活字を用いての、かな文字による日記を病没するまで書き続けたのだが、盲目の自身は目にする事ができないにもかかわらず、その強い意思には、ただただ敬服するばかりである。印刷用具と日記は県重要文化財とされ、旧宅の側の古刹蓮乗院に保管されているという。

この日記を「葛原勾当日記」と命名し、解説文が公刊されたのは大正四年であり、編者は孫、葛原である。葛原は戦前戦後を通じ、数千編の童謡を作詞し、また、全国の校歌を四百編余り作詞している。福山市内の小中学校だけでも二十数校に及ぶ。

童謡の中でも「夕日」は余にも有名だが、幼いころから目にした、八尋の山々に沈む夕日を思い浮かべての作詞だったと想像される。地元の人によれば、「唐橋」地区もしくは、「上御領」からの夕日がことに素

晴しいという。

旧宅の前の童謡碑は彼の没後三周年、昭和三十九年の建立である。毎年十二月七日には「ニコピン忌」として、地元竹弘小学校の児童が集い、童謡祭が行われる。テレビニュースなどで目にした方もあるのではなからうか。「ニコピン先生」の言われは、ニコニコは平和円満、ピンピンは進取を示すと言われたという。

毎日九時、十二時、十八時には町内に「夕日」のメロディが流れ、「文化の香りあふれる歴史の町」のイメージが彷彿と、聞く人の脳裏をよぎる。

この町に来春、着工後三十年の井原鉄道が接続され、また、福山市との合併の動きもある。静かな町にも大きな時代のうねりが押し寄せて来るようだが、いつまでも、文化の香り豊かな町であって欲しいものである。神辺町観光協会編集の「かんなべ百景」によれば、町内には古代から近世までの豊富な散策コースが溢れていることに改めて驚く。これからも折りにふれて、となり町、神辺の散策に出かけてみたい。

万葉集を吏読風に よんでみると

佐藤 寿夫

ここに一首の万葉歌があります。

天智天皇が蒲生野で狩りをなさった
ときその額田王が作った歌です。

あかねさす 紫野行き 標野行き
野守は見ずや 君が袖振る

茜草指 武良前野遊 標野行
野守者不見哉 君之袖布流

(巻一の二〇)

従来の日本古典文学全集の解説で
す、原文は次のように表記されてい
ます。

茜草指武良前野遊標野行野守者不
哉君之袖布流

原文に書かれているのは当時の漢
字(万葉仮名)であつて区切り点な
ど、なにも記されてありません。

日本古典文学全集の訳では、しやに
むに三十一文字に区切り、

(あかねさす紫野を行く 標野を
行つて 野守は見ているではありま
せんか あなたが袖をふるのを)と
訳しています。問題は額田王が葉狹
行事のときこの歌を詠まれたとなつ
ていますが、はたしてそうでしょうか。

そこで、額田王の身上を調査して

みると、正史では、『日本書紀』の天
武天皇の条に「天皇、初め鏡王の女
額田姫王を娶して十市皇女を生しま
せり」とあるだけで、その出自はも
ちろん、生没年などもはっきりした
ことは何もわかっていません。

齋明天皇に仕え、大海人皇子(の
ちの天武天皇)との間に一子をも
うけ、後に天智天皇の後宮に入ったと
いわれる額田王、それ以上の事実は
万葉集のなかの彼女の歌に付された
左註から想像されるものがすべてで
あるといつてもよい。そのわずかな
情報から想像される波乱に富んだ生
涯……上代の激動期に、その時代
を代表する名高い二人の兄弟。

天智・天武の両天皇の寵愛を受け
たという事実は、彼女の美貌を想像
させるだけでなく、時代の激しい動
きを語つて余りあるものがあると思
います。

万葉の言葉の達人、歌聖と称され
るにふさわしい人物が柿本人麿呂で
あるならば、万葉の才媛と称するに
ふさわしい人は額田王といつても決
して過言ではない。女性でありなが
ら歴代の天皇の傍らにあり、しばし
ば天皇になりかわつて歌詠みしたほ
どの人物です。万葉集に残された彼
女の十三首の歌は、そのどれもが秀

作として名高いものばかりです。

額田王は天智天皇七年五月五日、
蒲生野(現在の滋賀県蒲生郡)で行
われた葉狹の行事に、天智天皇の妃
として、弟の大海人皇子、諸王、内
臣及び群臣などと共に参加していた
と日本書紀に記されています。また
この歌もこの時に詠まれたとされて
います。当時の葉狹の行事とは、男
性は野山を駆け巡る鹿や兎、鳥など
を狩りし、女性たちは、野にある草
花、薬草などを摘み、それを集めて
当時の医薬品に使用したり染料に用
いたりした。

天皇が主催する狩りと野遊びで、
現代で言うならば一種の軍事訓練と
ピクニックを併せた行事であつたの
ではないでしょうか。

さて、歌の作者額田王は初め弟
(のちの天武天皇)に愛され一子ま
でももうけながら、なぜ大海人皇子
の兄の天智天皇に召されて後宮に上
がつたということが大きな疑問とな
ります。弟の女を兄が取り上げたとい
うことになりません。ここに、この
歌の謎めいた秘密が隠されているの
です。天智天皇と天武天皇は兄弟と
して正史ではなっているのですが、
最近の研究では天智・天武の兄弟説
は誤りであることが指摘されていま
す。

額田王は政略の犠牲になつて天智
天皇に召されたのか？

のちの壬申の乱の前触れかもしれ
ません。
さて、本題にもどります。これか
ら吏読によつてこの歌を解説してみ
ると、まずこの歌の冒頭にある茜草
と詠まれている。あかねは、あかね
の根で鎮痛剤として、また緋色の染
料として古代からよく使われていた
薬草です。

和名抄の表記は「茜」「阿可櫛」、
本草和名の表記は「茜根」「阿可櫛」
で、「草」の字は見えませんが、「草」
を書き入れず、ただ「茜」
または「茜根」とかけばいいわけな
のですが、ここでは意図的に「草」
を書き加えて「あかね草」としてい
ます。なぜでしょうか。

吏読文では、「草」の韓国語音は
「초」(男性の性器をあらわす「초」
へ賢音に似ています。)これを次の
字の「指」にかぶせて読むと「草
指」で「賢が」を意味する韓国語
の「초지」(漢字表記となります)。

「茜草指」は「赤い賢が」という意
味の韓国語の漢字表記なのです。
「茜」は「赤根」とも表記されたよ
うに赤色を表現しました。

茜の韓国語は「초지」で、古代
語で「초지」ですが、この「초지」

または「**子立**」は「幻影」をも意味します。「**子立**」または「**立**」立つたのでの意味にもなりま

す。「**子立**」は、「**幻立つ**」という語句になぞらえることができるので、過去の人。大海人皇子は額田王にとつてまさに「まぼろしの人」その以前、愛した人であったのです。

その幻が現実にあらわれたので、「まぼろし立つ」の感慨をこの「**子立**」にこめて歌ったのでしようか。二重構造でよく詩を書く額田王ならではのことと思われま

す。「**指**」は韓国語の「**さし**」、男性の「**股**」すなわち性器をあらわします。「**指**」「**相七**」「**佐斯**」「**佐須**」「**恋都**」「**思都**」などと、万葉集とか古事記に記載されている漢字表記は、おおむねこの「**さし**」または「**さ**」(城)を意味しているのです。

「**草指**」は「**賢**」(賢が)、「**指**」は「**さし**」(股)または「**さし**」(股)で字と意味を二重にかさねていますが、両方とも同じ男性の性器を表現しています。

「あかねさし」または「あかねさす」は枕詞です。

茜色に色づく照り映えての意から「あかねさし」は「照る」にかかるとされています。表記は「**茜根指**」

「**茜根刺**」など。

「あかねさす」も、①茜色に色づく照り映えるの意から「日・昼・光」に、②紫が赤みを帯びているところから「**紫**」に、③茜色に輝くように美しいの意から「**君**」にかかるとされ、「**安可禰佐須**」「**茜根指**」「**赤根佐須**」などと表記されています。

なぜ「日・昼・光」なのでしょう。「あかねさし」「あかねさす」は先述どおり、「**男性自身**」を表現する陽性的で力強いものなだからです。

ではなぜ「**紫**」「**君**」にかかるとしようか。「**紫**」は女性の象徴であり、「**紫**」は男女関係の相手つまり性の相手であるからです。

色については、男女も同じです?では、ここで従来の解釈と真の歌の意味とを比べてみます。

従来の解釈(巻一の二〇万葉集から)

茜根草 武良前野逝 標野行

野守者不見哉 君之袖布流

(あかねさす) 紫野行く 標野行き

野守は 見ずや 君が袖振る

現代語訳

(あかねさす) 紫のを行き 標野を行って 野守は見ていないではありませんか あなたが袖を振るのを

さて、吏読文で読みは 茜草指 武良前野 逝 標野

行 野守者 不見哉 君 之袖 布流

真の意味

茜草 股(指) 紫野 逝き 標野 行き 野守は 見ずや 君 はさみ ひろげ

(赤い股(賢)が 紫色の野原(蕃登) を行きます 標野(禁野)を行くので

す 野守は 見ていないでしょうね 貴方が私のはさみ(両股)をひろげるのを)となり、要約すると男女のまぐわいの歌となります。

それにしても額田王のこの歌は、なんと大胆な……これが本当の万葉歌なのだつくづく感心させられます。

大胆不敵な不義密通の描写を「君之袖布流」と、いとも優雅に「誤解」をさせながらの作詞テクニク、なんとかしこく空恐ろしい女性なのでしょうか。

史読風を読むと万葉集の真の意味が理解できるといわれるのは、韓国女流文学者の、李 寧 熙(イ ヨンヒ) 女史です。

つぎに詠まれた歌も実は、蒲生野の唱和歌(大海人皇子が額田王に返歌したもの)

大海人皇子の歌(巻一の二十一)

従来の解釈では、

紫草能 尔保敞類妹乎 尔苦久有者 人孀故尔 吾恋目八方

紫の にほへる妹を 憎くあらば 人妻ゆえに 我恋ひめやも

(紫草のように におうあなたを 憎いと思つたら 人妻と知りながら 恋をしましようか)

吏読文の読みでは、

紫草能 尔保敞類 妹乎 尔苦久有者 人孀 故尔 吾 恋 目 八方

紫草は 愛しや 妹よ 失い苦しい 言かけくるに われ

ひそやかに 脇見せむ (紫草へとは)は 可愛らしい

君を失って 苦しいのだよ ことばをかけてきたので

わたしは 人目につかないように 脇見をするけど)

さて、二つの歌を解読してみるとリアルに歌の意味が理解できます。

引き裂かれた恋い、お互いに愛しながら苦しむ額田王と大海人皇子、蒲生野の獵場で人目を気にしながら一時の逢瀬を楽しむ、なんと大胆かつスリルのある情景でしょうか。

言葉の解説を句ごとに致しますと解説が長くなり紙面が多くなりますので本文のみの解説でお許しください。また機会があればお話しさせてく

下さい。

おわりに、史読文の説明を簡単にいたします。

史読とは、世紀前の古代韓国時代から使われていた「漢字で韓国語を表記する」借字法です。韓半島は早くから漢字の文化圏に属していましたが、日本に漢字が伝わる以前に、漢字に接し漢字を借りて言葉を表現したのでした。

わが国にも漢字の伝播は韓半島より遅れてありましたが、すでに当時渡来していた人たちは母国語であった史読文で色々のことを表記していたと思われまます。万葉集の表記も一部は史読文で書かれていたのではないかと推測されます。李 先生も万葉集の古い歌は史読文で書かれていたといわれます。

いままで教えられたり学んできた記紀・万葉集もほかの角度から読んでみるのもまた一つの楽しい勉強の仕方であると私は思います。

参考文献

- もう一つの万葉集 (李 寧 熙著) 枕詞の秘密 (李 寧 熙著) 記紀・万葉集の解読通信 (ペン・エンタープライズ)
- 日本書紀 (日本古典文学全集)
- 古事記 (日本古典文学全集)

城郭研究部会活動報告

小世良城塞群調査報告

遵行使節 沙弥

号外、号外、このほど城郭研究部会は、世羅郡甲山町の山の中に「幻の大城塞群」を発見したと発表!

四月二十九日夕刻、会見した出内城郭研究部会長は、小世良城周辺の山域に大城塞群があることを発見したと公表した。この発表によれば、周辺地域の完全な調査は終了していないが、小世良城とその西側の二つの峰に城塞が存在することを発見した。この三つの城塞を結ぶ尾根及び谷筋は切り岸や大堀切による防備がなされており、一連の城塞群とみなすことができる。また、城塞の普請状況に統一的なプランニングが認められることも前の推定を裏付けているとしている。さらに地形図から見ると現在、未調査の周辺山域にも城塞が存在する可能性が強いため、甲山盆地南側の山全体に渡って屏風状に城塞群が存在する可能性が強いとされている。

〈城郭研究部会発表の要旨〉

同研究部会は、四月二十九日早朝から福山を出発、同日午前九時三十分より登山調査を開始した。調査参加者は同研究部会のメンバーで出内部会長、小林副部会長、坂本氏、黒木氏、高尾氏、木下氏の6名である。当初の目的は、小世良城の実地調査であった。小世良城南側の谷から登山を始め、小世良城が存在する峰とその西側の峰を繋ぐ尾根に登るべく急峻な切り岸に取り付いた。登山は困難を極め、木の枝を頼りに何とか尾根までたどり着くことができた。尾根を東側に進むと郭が発見され、それを小世良城と思い調査を開始した。調査を進めるうちに自分達が発見した郭群の構成が県の「中世城館調査報告書」と全く合わないことに気が付いた。このことから、現在いる場所が小世良城のある峰ではなく別の峰に登ったのだと結論付けられた。

そこで、この郭群を発見した峰から尾根伝いに西側の峰に移動した。移動先の独立峰にも数個の郭群を発見したが、これも県の「中世城館調査報告書」とは一致せず、小世良城ではなかった。この独立峰の更に西側の峰は、深い谷を挟んで存在しているが、これが小世良城が存在する

峰と考えられた。そこで一旦、谷へ下ってみた。谷底に下りると谷の一番高くなっている部分に大堀切が見され、この谷も城塞の防備の一部を構成していることが分かった。谷底の大堀切りは二筋存在し、堀切りの間にも五段程度の郭が存在し、谷筋を厳重に防御していた。さらに、小世良城側の大堀切りにはおそらく木橋をかけていたと思われる遺構が存在していた。谷底の防備の厳重さに驚きながら西側の峰に登ってみると、そこに多数の郭群が発見され、基本部分が県の「中世城館調査報告書」の図面と一致することから、この遺構が小世良城と確認された。しかし、実際に調査してみると県の報告書に記載された図面よりはるかに多数の郭が存在し、規模の大きい城塞であることが確認された。

今回発見した城塞群を歩いてみると、次のようなことに気付く。この城塞群の切り岸は、郭の内側に向かって円弧を描いた形に作られている。横矢掛かりが強く意識されている。郭を上下に並べる場合に、上の郭と下の郭の繋ぎ部分には郭の両端、又は片端に削り残しの土塁を作り出して郭を渡る通路としている。この土塁の外側側面を堅堀状に削り落とし側面の防御を厳重にしている。殆

どの郭に右のような普請が行われており、これらの城塞群はほぼ同時期に統一的な計画を持って構築されたと思われる。

この小世良城周辺の城塞群を仮に「小世良城塞群」と呼ぶとすると、小世良城塞群の築城年代はいつごろになるのだろうか。最も納得されやすいのは、応仁二年（一四六八）八月に戦われた「小世良合戦」の時の築城と考えることであろう。東軍の主将・備後守護山名是豊が与力の小早川氏等の国人を指揮して築いたと考えれば納得できる部分が多い。また、備後の城跡を多数歩いている城郭研究部会のメンバーの意見としてこれら城塞群の構成は「備後の城」らしくないという認識で一致しており、山名是豊が本拠地播磨から縄張り師を連れてきたと考えればこの点も頷ける。但し、『芸藩通史』等の地誌にもこんな城塞群が存在するとの記録はないことから、決定的な確証は得られていない。

城郭研究会としては、今後、更に詳細な調査を実施して城塞群全体の遺構を明確にすると共に、築城年代や築城目的を明確化して行きたいとしている。

事務局日誌

四月一日（土）

「古事記を読む」参加一八名。

四月八日（土）

「備後古城記を読む」参加一二名。

終了後、翌日の例会の資料作成。

四月十九日（日）

歴史研担当のバス例会「西大寺・邑久・牛窓の史跡巡り」講師は田口会長・平田さん・木下さん。参加九二名。参加者が多く、久しぶりにバス二台での例会となった。

四月二十五日（土）

第四回郷土史講座「太田庄地頭三善氏について」参加三四名。講師は木下和司さん。

四月二十六日（日）

「加茂町石造物調査」参加六名。地元の佐藤洋一さんが案内役。

四月二十六日（日）

第一六回「親と子の古墳巡り」の下見。参加七名。

五月五日（祝・火）

第一六回「親と子の古墳巡り」参加約一六〇名。参加した小学生は古墳クイズに大喜び。昨年の倍以上の参加となって大成功。

五月九日（土）

「古事記を読む」参加一九名。中学生の小林大士君が初参加、ちよっと

難しかったかも。

五月一日（土）

「備後古城記を読む」参加一五名。

五月六日・七日（土・日）

秋の一泊旅行一回目の下見。予定していたコースに無理があることが判明。再度下見をする事に決定。

平田さん・寺崎さん・塩出さん。

五月二十四日（日）

「加茂町石造物調査」参加八名。

この春最後の調査となった。終了後、神辺町御領の八丈岩と法童寺古墳の見学に。

五月三〇日（土）

第五回郷土史講座「戦国大名としての毛利氏」参加四三名。講師は出内博都さん。於福山市民図書館会議室。

六月六日（土）

古墳講座Ⅴ「辰の口古墳見学会」参加一八名。神石町教育委員の池田さんが案内をしてくださる。

終了後、福山市中央公民館で翌日の例会資料の作成、参加六名。

六月七日（日）

バス例会「太田庄に中世を訪ねる」講師は田口会長・木下さん。梅雨の晴れ間の充実した一日だった。

参加五二名。現地参加二名。

※講座等の会場は、とくに断りがない場合、福山市中央公民館。

古墳講座Ⅴ

七月の古墳講座Ⅴは考古資料の展示がとて充実している倉敷市埋蔵文化財センター（倉敷ライフパーク）の見学会を実施します。

《実施要項》

《日 程》七月四日（土）

《集合時刻》一時三〇分

《集合場所》福山駅北口

《見学場所》倉敷ライフパーク

《参加費》実費。会員のクルマに分乗し、同乗者が高速代金・ガソリン代を負担します。

《受付》山口部会長宅

（〇八四九一四五―六一七三）まで。

六月二日（月）～二四（水）

午後八時～九時（時間厳守）

編集後記

ここ数年、鎌倉奉行人の家系（三善氏。杉原氏もそうだと思います）の研究にはまっています。その際佐藤進一氏の著書が参考になります。皆さんも読んでご覧になってはいかがでしょうか。 遵行使節 沙弥

備陽史探訪の会事務局 ☎七〇一〇八四

福山市多治米町五一―一九一八

☎〇八四九（五三）六一五七